紹　介

藤田恒春校訂『増補駒井日記』

『駒井日記』は豊臣秀次の側近の一人で右筆を兼ねた駒井重勝の日記である。残されている期間は、文禄二年（一五九二）閏九月から同四年四月までの二年足らずであるが、古くから注目され利用されてきた日記であり、豊臣政権なかでも秀次政権を研究するには欠くことのできない重要な記録である。これまで利用にあたっては多くの場合、明治三五年（一九〇二）に刊行された『改訂史籍集覧』に収録されたものが使われてきた。しかし、『改訂史籍集覧』の『駒井日記』は、これまでもしばしば指摘されてきたように、誤りや意味の通らない箇所が多々みられ、そのままで利用するには多くの問題を含んでいる。

その原因のひとつに、原稿作成時における誤写や印刷上のミスなど初歩的なものをあげうるが、もっとも大きな要因は、『駒井日記』の原本が伝存せず、不備な写本を十分な校訂なしに用いたことにあるといえよう。

本書は、多くの写本をもって校訂することでこうした不備を可能なかぎり補い復元したものである。内閣文庫・尊経閣文庫・加能越文庫・愛山文庫・祐徳文庫・竜谷大学図書館・和田滋穂氏などに伝来した十数種にのぼる諸写本を集め、底本とした内閣文庫の「駒井日記」との細かな校訂が本書には施されている。そこでは、『改訂史籍集覧』の『駒井日記』の不備が単なる誤写や誤植といった単純なものだけでなく、多くの脱文のあることが明らかにされている。それらのすべてを紹介することはできないが、文禄二年閏九月一三日の条では「伏見作事仕候衆　太閤様御傍衆への扶持分」の文言とともに織田有楽ら六人の名と扶持米高が『改訂史籍集覧』の『駒井日記』では欠落している。このほか祐徳文庫本の「駒井中書日次記」からは、『改訂史籍集覧』の『駒井日記』にはまったくない文禄三年正月朔日より一九日までの記事が見出されるなど、数多い新事実が明らかにされている。

ところで本書は、『駒井日記』の校訂部分、駒井重勝発給文書、注、解題、附表、索引とからなっている。『駒井日記』の校訂部分は、本書の中心部分で、底本とした内閣文庫の「駒井日記」をあげ、各写本との詳細な異同・校訂がなされている。

駒井重勝発給文書の部分では、『駒井日記』に収められている文書以外で校訂者の藤田氏が博捜された四七点が収められている。注の部分は、『駒井日記』の校訂部分に対応するものであるが、その頁数は一四〇頁にも及ぶ膨大かつ詳細なものであり、次の解題とともに氏の『駒井日記』研究ともいえるものである。そこには日記の本文から直接には知ることのできない多くの情報が盛り込まれている。解題は、伝来・記主・写本・日記とその内容・発給文書からなり、『駒井日記』の全般的な位置付けがなされている。附表は秀次の天正一九年（一五九一）一二月二三日から高野山で死去する文禄四年七月一六日までの秀次の居所とその関連記事をあげたものである。これは、『駒井日記』の理解を助けるものであるが、それとともに秀次政権研究にとって基礎的かつ重要な情報である。索引には人名・寺社名・地名の索引が収められている。

最後に、ここ二〇年近く日記を含む古記録類刊行が停滞するなか、氏が多大の労力と時間とを投入して、本書を刊行されたことに敬意を表したい。

（A5判　五二五頁　索引二七頁　一九九二年一〇月　文献出版　一五〇〇〇円）

（藤井譲治　京都大学助教授）

日本学術会議だより　—No.28—

平成五年三月　日本学術会議広報委員会

日本学術会議の第一五期活動計画の大きな柱である「学術研究の国際貢献の重視」の具体的方策の一環として、「アジア学術会議（仮称）」の開催が、平成五年度予算によって実現することとなりました。その内容は、学術研究が環境問題等の諸課題を克服し、人類の繁栄と世界の平和に寄与するとの認識に立って、本年秋に東京で、我が国と地理的・文化的に関係の深いアジア各国を代表する学術研究者が一堂に会して、各国における学術研究の現状、アジア地域における連携・協力のあり方などに関し意見を交換する場として開催するものです。我が国を含め一〇か国程度のアジア諸国から、代表者を招へいする予定です。

会　告

去る五月二十七日に開催されました史学研究会理事・評議員会におきまして、左記の事項が可決、承認されました。

記

一、平成四年度　決算報告
一、平成五年度　予算案
一、役員交替
(1)常務理事間野英二、金田章裕、理事河内良弘、竺沙雅章、藤縄謙三、松尾尊兊、評議員石井　進、市原寿文、佐原　真、中村幹雄氏の退任。
(2)理事に紀平英作氏（評議員より）、評議員に伊藤玄三、河原純之、五味文彦、鈴木利章、冨谷至、南川高志氏を選任。
(3)常務理事に永田英正（理事より）、服部良久（評議員より）氏を選任。
(4)旧常務理事間野英二氏は理事に、金田章裕氏は評議員に復帰。

編集後期

会員の皆様いかがお過ごしでしょうか。七六巻四号をお届けします。国内政治は長期政権与党の時代が終焉し、政治改革の一歩が踏み出されようとしています。一方、相次ぐ自然災害は何かを暗示するかのように、国内外の各地に大きな被害を与えました。こうした非常時とも思える事態を私たちはいかに乗り越えていくべきか、今こそ過去の歴史から多くを学び取ることが求められているのではないでしょうか。（た）

本誌には文部省科学研究費補助金研究成果公開促進費が交付されております。

一九九三年六月二五日印刷
一九九三年七月一日発行　定価一二〇〇円　送料五二円
史林　第七六巻第四号（通巻第三八〇号）
京都市左京区吉田本町　京都大学文学部内
発行人　史学研究会　振替京都七—五一五五番
理事長　朝尾直弘
京都市下京区七条御所ノ内中町五〇
印刷所　中村印刷株式会社